説叢大全

秋之部上

利
1061
4

へ5

蕉翁発句説叢大全巻第四

葛飾　素丸　著述

全　南臺　検校

秋部上

ねぶの木の葉ごしもいとへ星の影

〔袋〕云七夕の夜なれハ合歓の木の葉越しもいとふへしと也眠らぬ夜明さへしをねぶの木によせたり〔解〕云新後拾遺集七夕の恋を恨ともいふかして一夜のちぎりにいたくとゞむ合歓ハ詠しける

ねぶ寐きタアふ恙ほむ眠るのなくなきは倍語ねむの木ともいへる夜の契りなれども此葉繊しといふべき也〔林〕此句を出さば〔説〕〔袋〕ねぶの木ぞとも聞えべしをねぶの木によせし歟とも又文句ひかば。ねぶの木。ましもいらば。さもよせたらんか。又二星のあふ夜ハ。眠らざ侍りみかや。古説いまだきかざる示なし。倍語ねどもすらざ成りし庚申の夜の思ひたぐへかや〔解〕引寄合歓の意味に叶はざるや。此末小限る意かとば○法らく。句意を考ふるに。合歓ヨロコビアハスと読む。其葉のゆふべに合へるの形容也。葉ハ至て細やかに茂りて寸の中より切く。翠簾を八重にかけたるごとき。その葉とじ…

いとひてまたかもせよ。一とせに一夜の契りある経ふと此方より意息して。思ひを述べる句也。優美の風流をつくして感ず。ねぶ樹縁語ハ星合への優艶のそり合せものなれ也。○格物記曰。夜合一名合歓亦名合昏。按圖經安和五藏和心志令人歡樂云云 ねぶるのこずゑはいらば。心をやりけれ。歓ぶるむるの能あまたハ此かし合の夜のいふ合せには。足に通るもの也。いらば。むべなる。かの夫木抄九九註 ねぶの木 貞應二年百首 藤原為家 いきといへハ世きき秋あるをねぶの木もねぶらねあふにとめる春かな 新撰六帖 かくれ 為家 うかりきるかくれよ花のためしうな我思ひてもちらぬ身なりて

今案ニ万葉集にハ合歓木ねぶの木とも ねぶりの木ともよめり
又六帖にハこの字訓也して かうかの木と読り 合歓木の事に
よくにしハ誤りあらし 此誤ハこの誤りをうけて新撰六帖にも
かうかうと読なともきたり 新六帖の歌その外いまだ詳ならされ
ども七夕の事などに引合せ見るべき也

あさがほに我ハ飯くふ男かな

解 云世をむさぼる者の飯くふにあくせく忙しき枕を高くして
青麻をする者にはこれを観想の句也男気をとる所也妙
ならと云ふべし 袋林 此句をさしてぞ

説 唯ひとつづくに字有をとる。観想ともいひがたし。又此句の
八男哉といへる所妙にいはれ、飯をあく飯くひ、青麻する
古人情の今日にして、何の興あるや。句解はのりがたしと云べ
し ○予按ずるに、此句意ハ、飯鉢の窓前、たとの形くりやき
に我ハ斯く息も長く節骨も健に生ひて食物をも志ろくうれ
食ふ男なりと、その形を表現に対して、一層に佗び紀南
をと云ふハせる物、十成の俳諧也。活法尤九なるぞ。微妙の場也。
をとることを云字眼也。世の人ハ、蕉といへばはやくも、いやはの
事とも思ふの これハ古人の涎をねぶり、糞を拱ふとも
いひて人の尻馬に乗るといへる人なるか。翁ハ却てにつまづき

人をゆかせて。作意凡例にかゝはらず。さんばい釣魚のあやなく
ものなくことをえたる故。し。是を句外の餘情といふなり。
後水尾院御製にも釣のみはあさなく〳〵に嘆このえてさうをも
えしき苑にてありける是悼はる多くきこえてさうなれど。
きものためしを。業え久しきなるに。見出度かるさもされし
とて名誉の事にハ。中々得かさりし。和歌にも。加藤治
達の場かるを。況や俳諧師の方より出生せし。俳諧なる とや

いかほどに悟りぬ人乃寿ゆかさよ

解 玄妙なる禅師の曰吾法にわれ今せうさら白念深一粒を百分
にわけて一ににかなふもいまだ実悟にかなはず三十棒の徒也
要は大悟ての人ハ悟をとり證をさると思心念底を浄くして一
点なし 袋林 此句を出さず

説 解 ハ句の解にあらず。悟心法の夜話とも云む。此句ハ悟道
を顕せし句なり。摘書の観想にして悟らぬ人のうたをいふ
なる句也。されば。悟道の論ハ。枝道にて。蛇足を添るとも云なる
筆しかくのごときハ。初案の耳にのみぞ。然れども句解
思ひたらし。なきにハ叶はず。俤とすべきなり 〇或書云 無名目有二舳
此句ハ我見の識也石火電光是猶鈍シ少死の火急なるかも
を大悟して今ハの時も覚悟して力のかゝりたらんハよし

○宅第四

句に振舞也義にとらはれてあらんにはいかで風雅の姿を備
裏に張臂せんは力のかぎりて真に正見とはいふべからず稿書
なりて義なくして淋しきと見ゆべきは正直也たとへて正見
ともいふべき形見却せざる所といはまし火宅八の巷に眼光落
見の真此正見とやいはん爲ば自在にして無く外より来る
に於ては 下略 此説高ぶらく此句解にかゝはり然れども理
論にして句の深みは迂遠なるものゝ情をよくかけるには
かゝはれど古来の評のごときは情に落理に凝てさして俳諧
のさかひにしもあらん一層々面白き句をなさしむ句にやと芽は
心ひ侍りぬ○浮かく梅ぞかるに此句を翁の骨折られし

而ハ云ひがたして情の実此理屈理論のことば…たる所に一向
句の正躰ならざる也生死の大事は電光石火を待ざれど中
にもいやをのがく夕べく思ふいなづまに…を人は百とせを生
の松永に子孫の栄えをうらん一葉此頃の露の宿りに今很
とたくさん者ものあはれなるを哀をさへ辨へ知らぬ人を却て
哀ふかきとやされし所深長の意味玄々妙々是許六が云
つる俳諧の國ぶりも知らざる人こそ哀をしげきなまじひなり
志のかる身は却てなまじと實に千萬の膓を砕て見るべき也
おかおよそ上一人より天下の人これにかゝはりて聖人なるむかしは
孔子出て何の役にかたゝむ釈尊現して實の神仏ならまし

世上一まん愚人すくなからず。聖人も君子も賢人もおほくして。愚なる行
ひわぬ事少しも悟らずして。知ぬ事を旦暮に一大事の念もなき。
知らずもの。知らぬ人は何の思案もなければ。却て苦しむ事も無し
きのふ一睡してすむなれば。俳諧の若さらせゆく心の實なし。世にも
所也。たゞやすくは解し難かるべし。日々沈思して。ハアツと云時。
解さるゝ句也。偽めきたる説のできれば。物に拘らざるもしるべし
實事也。物を稽ざるにて。我家の滑稽の心骨をもつかぬ
但し底とぬけぬ俳人は実すまぬ事 ○此句上の意と一懸にして電光朝露はらくの
あるき物の浪かかりし維摩経にも法華経にも世の無常をたと
へられし故悟るべきもあるをいひとつまじき心なき心して悟らぬ

よづかきとの角はしは上の句を合て一對に聴かぬ所なし
本間を馬が宅て。髑髏どもの。菓づみを挿へ
飾たる不成画て。葬墓は堅くわけたり。誠や
生あるの身はかれなば。世あるにたとへてもなんや。かの
髑髏を枕として。絵すく夢をみつを。けりさになるも。
只此生たの。去らぬ事なりのなき事

いなづまや顔のところがすゝきの穂

解 云この句を器して出し 秋風にやくつけてもいかなくとのはいまし

落ちひろふ此句のなも侍るにや 袋林 此句を出さし次

説 解 此しまる解ーわしけ事書を略し出して八すえぬし候て

事なと中之小出まえ句ちやく解しやすし。文調ち事書。

謂なり。争かハ略して きかきをき。此句ハ略して八かきし

銀をのうまなりだかハ。○芭蕉翁行状記云 路通作 丹野ゟ這ふ

て骸骨の画に骨相観の詞なかし給ひてよかり。元禄七年七

月十日比の吟也。本書ゟ馬 俳名ハ丹野なふめくの句ハりよう

ふゆへよる句也。○此圖ハ世に一体骸骨とかく八書なりて。ふてつ

どもの舞ひうたひ。但し猿楽の酒宴し。能ふさ催ありして男

女配遇のうちまでを。施くに絵にかきて。一体の為奇話を

りくなり古版近版も。古板八尤殊勝なるものなり。馬も笠

らんつきく画かけるもん。句意ハ略しかるらし。

秋十とせ却て江戸をさし古郷

解 云客舎并州已十霜帰心日夜憶咸陽無端更渡桑乾

水却望并州是故郷よく此詩の心に似より 袋林 此句を出ます

説 解 此詩の心に似たりとハ。尽ぞえて是世ふたつ也。たゞちに

此詩をふまへて。発句に謂をなすなるへし。廿八字を十七字

に言ひ縮めたるハ。俳諧の妙なる所なりて。詩ハ廿一字紙當相損

とぞてふ也。○句意ハ。翁の舊里ハかなより。伊賀なり

○巻ノ四

ど。東武の深川に住して、是より諸国へ行脚せしなれバ、
江戸もかりの住ひなれども、今に至てハ、却て江戸を古郷として、
古里と思へるハ、無端（アヂキナキ）飄泊無常の身なるよし、感偶即興
也。詩の心も、かの古里ハ咸陽なれども、并州に十年遷されて、
今ハまた并州を離れて、他国へうつさるゝ時ハ、并州をも却て
古郷といふなりとぞなれバ、無端（アヂキナキ）世のならひ哉や

よろ〳〵とうけて露あし
ひよろ〳〵となほけしや　女郎花

解 云續古今集にて僧志の女郎花のをみなへしおもひ志居まで露け
けりかな 袋林 此句を出されし

説解 引哥これよく似たるゆへに、いつ語も古哥を引合さバ
色せんずれども、爺よ誨をしうらく、雅言を吟ずることに必
古事をばまんとの念もなかるべし。折に触て自
然と叶ふもなるもし。女郎花に露かゝるをば、古哥志るしとも
解するべき詞也。一句の粉骨の所をさら深して可なるらん。○
此句ハ、ひよろ〳〵の文字に字形容。粉青也。この草のたちのび
て、花ハおもくかしげる、露（モ）げになるが、其の痩て、かゞまりたるさま。実
にひよろ〳〵の姿あはせらるべし。されや。俳諧におゐてハ
ハ一本一草なれども、おろそかにせざるべしとかや。或ハ心を用ゆべき所ハ深
く爰しみ、其の葉にも趣あるべし。此百練くあり ○笈日記

岐阜部留別四句の内にもこれにて盡くしとみえたり〇句
選にハよろしくとりあげて盡しとみえたりよほくもたまハ
きを盡めし先文にけて盡けしに穏也いづれも句意ば
害さるを好むにもあらざるべし今ハさ偏く向上の人
多く是に決せり彼ハ語りたれども子が務子の説々
みて句意とされ害ありけれども用し風流なるべき
ある七十餘年前のすいたぞこの當時に極めむ極むとも
癖言成べし
升買うて分別かはる月見かな

〔袋〕云是世人ハ住吉の市にして升を賣て世渡るを計るの也我
も升につきて升ハ買たるが月も面白きにつれて升買ふ俗
時の分別にて計る二十日をつるる心に始うて升買しハ世俗
氣自然ハ風雅なり翁の風情推て計るべし〔解〕云
莊子斗斛成而天下人始争是等にかなへ人皆升買てハおもへる
事を忘れ隠士の分別の翁も形を分て計る事出とも深く
句情をかむべし〔林〕此句を出さ須
〔説〕〔袋〕注一向の妄注なるにたてもこの翁の心を以て世の氣
風雅氣と云ハ川あらんや何ぞハ翁にあるべし世渡扉
の僧なりの奈良て爾也九倍のうへより説とまうしたるは あるべ

不埒也。【解】歩みならず。荘子謗に然り。○去来抄曰此句如何
去来曰なにかはかなき中の七文字見えざりし発句は辞文有
る人の家に行て見たる人もし升と云物は衣帯の道具なれば
此升買て後は鍋もかしく桶もほしく世の中に隠者の嗜
よりはやまるを鑑みにはやされし也と云々 ○住吉名勝志云
摂津国住吉太神宮毎年九月十三日宝の市として大神宰
主社務社司大祢宜出仕して神供す商人升物さし
などを売る吉兆なりとて諸人買て帰ると云此句
宝の市にて吟せし也。元禄七年の吟也。

蓑虫菴

今宵たれよし野の月を十六里

【林】云新古今源三位頼政こよひたれすゞふく風を身にしめて
よしのゝたけの月を見るらん けふなに二千里の外を十六
里になして吉野の嶽の道程を行歩の録句にや此句の心は
よしのゝたけの月を誰かみるらん我も行てこそ心なりとめて
一篇の静なる情を見るのみとも自讃せしなるべし法師玄青
の説也発句もかくつくや深意可尋なるも後人の心にて

無し尋出多く聊もなかりし〔解〕云 引歌日本 すゝみて比小身を
慰めくと記し出して。義仲菴ハ祖翁の古跡伊賀の山中也此句
の十六里ハ山中より芳野への行程なるべし〔袋〕此句を出さず
〔説〕〔林〕引歌ハ詞わけ里三千里を十六里にして。名残を行歩之
語句をは。文脈一向に聞え候。いかなる意にや。いぶかし。町間
を歩人の。股かゝえくもまで。又高程の字。解を候ふし行
程の書誤なり。又ハよしのゝ嶽の。高程とかけれど。高き稜のやうなりや。
何とも心ぶかしくて。〔解〕出来り。但し書風に身を志めて
こはまに楽に遠。出なやかりて。達歌ながら。よくもたゞして
記さるべきとかや ○新古今聞書 宗祇の注也 云すし吹こハ。ちひさき行

のしらせ也。みどりハ小竹之万葉ニ篤乃字をかり今本ハ误て蔦とも 此よしのやまかけの月を詠うえ
名高くてハ身にしめくらえ候をよめするを知りて高の
かたち雨の月をつゝると自讃の中しなかけよしの山のかけの月
を思ひやりてよめるとみえく知るべきとや此句ハ旅行者の
むねもしるきとやと云 ○句意ハ。今宵の月も晴たると。旅人
の芳野すてなるらん。浦山しさよ。近くならば。我もおなじ
からんを。十六里無ぞてぬれバ。たやすからずと。只その夜ながら
よしのの月を思ひやりて行くべし。思ひやりて。吟をしとみて
旅也。旅行者のこゝろ。おもしろきとかや

馬上吟　翁の此まゝし記行にも此句を注て今たしかなり

みちの邊乃むくげハ馬に喰れけり

袋 云此句ハ木槿を教訓として午時の日に落るゝは馬に喰れしよりの作意成也此句面に深意ありとさま〳〵ハ芳山が曉山集にも此句を載て路邊の木槿ハ馬に喰れけりといへる句には非して一向の野卑の雑言也と識者りも偏に芭蕉の上戯弄(ウトボケ)を深く悟らざる也 林 云前にもありつるけしきすがたのとゞまれぬ清しらけさまにあせひ花さくあせひハ馬酔木と書てる濃毒なれも馬中につかくとも似をつけよとも槿も馬ちるゝ不喫

をいへるにも喰れずもとぞらさしむ人にも恥られるふりもくゝち只此句杭の折るゝと云ハ偏したかへし 解 此句を出さんば

説 袋 是ぞ邪妄不可信用也木槿を師教としてとふハんねど牽牛子(アサガホ)ハ一時の栄え木槿ハ一日の栄えと古人もいはれし似く似たりのえましてや蕣と木槿の差別もしらるゝや又日に潤しとあれ喰れしとハ例の無理無体の邪智也かくあれども何の妙かあらんや此注をとりて辛妙なる無理をやいはん又曉山集をひくといへ共集がごとき邪人の説也さとゆきならずや古池を山吹と竄くるよしいへり如きの不堪者なれば其ほかの人さいそぐ此句を聞

しらずのはらんや［林］馬酔木の事、此句ハ見ぬはらなれバ、木槿
とまちがへたるとみえたり、あやまてる笑也、又いふ者もはやまれり
［説］堀川院御時百首に俊頼朝臣、おもひつかけたまへ、横野
のつゝみ小筋つゝじが岸にあせをたて咲又貞徳の肝要抄に曰、
玉田横野ハ奥州の名所といへり、然れども玉田横野ハ備中
国也、高倉院御時大嘗會、備中国の哥、新拾遺集、賀部
に出たり、玉田横野ハ和泉国なり、新拾遺集雑に哥之奥州
とするハつゞじなけしと奥州の名所をのせし、八雲御抄にあ
きぞ、とひたゞしてみるに及べし。○あせびハ誤也、あせミ也、
万葉にも出たり、又此中の字を、途中とかくハ此外にや、馬

酔木と木槿ハのみ文語也。○賞せるへり、句選にもよりと
云羊素問答抄に此句抄には、かりとはり手爾葉遠しといふ
うしとおもへるに許六が集よりとまたを随ふとくつ、盤れ
ども、伊勢古雅談にハよりとハ手爾葉違ひあり翁の自筆乃
經冊にかりとさ浅と見へしといへり、按ずるに、たりハてはりの
仮名にて、咲きてはりといふ義也、手爾葉違ひにハあらずされ
ども、かりとしあるべし、こゝにた流にも、かりといふよし流さ
ここぞ屋純一句の末にてかりあて面白かるべし、只咲れき
とらふのこと也。○句意ハ、人ハ居所にこそ、よるなりのあれ、世の諺
に出る枕ハ新たよすがなり、人をめぐ、宿の哀れに、な道

○巻第四
とられかしそのすゑ。此句においてハ。超極大秘訣なり。しる人
決してなし。其解を志るかどの人なんにハ。翁の句ハつきと
掌中に握るべし。知止の道。其止る所を志らざれバなりに
だにも志らで。美濃の五竹（後に五筑坊と改む）も。此句意おそらく天下に
知る人なしとやすらとかや。けふなんしが。○又或説にむかし。
翁混本寺の佛頂和尚の弟子と成し時。おくぞうたびかれ。
勤学ありしに。佛頂ハそのごとく。俳諧を制せられ。綺語
怪詞何の益ありやと。再度叱られしに。或時逆里に時鳥
なりて。佛頂翁とともに行しに。ともくも俳諧のことを
いひ出されしに。翁のいはく。俳諧ハ今日のことく目前のこと

まそれとゝ申されしかバ。然らばそこにおる。本握にて一句せ
よとありし時。即吟せしに。時に佛頂にふ感して。日善哉
々々。俳諧もかく。深きなりのおもむき。殊に感ぜられき。
のちハ制し給ハざりしとかや。禅意に叶へるところなりとぞ。
と云云。此説も亦不審なり。此句ハ。野ざらし記行に出て。馬
上ノ吟と題せる上よし。佛頂と同居ハせられしも不審也。も
しや江頂の寓にし時。さればしに此句を咄しせられけるも知る
庵ふらんと。○野ざらし紀行に。素堂亭にて。此度紀行二三
句の奇逸のよしいへり

○巻第四

金昌寺の柳ちるを

庭掃ていでばや門にちる柳

[袋]云此句曰行の人とわかれて寺を出る時の句とみえたり句の心ハ我も八柳のちらくを別るゝのなごりさかりに庭ハかこさしと庭を掃て出べきとなり[解]云加州金昌寺にてよめり世説曰郭林宗毎行宿逆旅輙躬自灑掃及曉去後人至見之曰此必郭有道昨宿處也これらの心をふくみて句を殊勝也

[説]句選の前書にも金昌寺の柳ちるをとあり[袋]本説と志らずして。めづらしき的のなりて推量之。笑ふに堪たり。[解]郭

林宗が事。似合ざるの也。是ゆゑ本説を志らぬ附會せしかや。○奥の細道に云。大聖寺城外。全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。曽良も前の夜此寺に泊りて。よもすがら秋風聞やうらの山と残す。一夜の隔千里に同じ。我も秋風を聞て衆寮に臥ば。明ぼのゝ空近う読経の声澄ますに。鐘板鳴りて食堂に入。けふハ越前の國へと心早卒にして堂下に下るを。若き僧ども紙硯をかゝへ階のもとまで追来る。折節庭中の柳ちれば。とりあへず此句を草鞋ながら書捨つ。○東西夜話云。何がし金昌寺といふハ先師一夜の宿りを給て。庭掃て出ばや寺にちる柳と云かたみを残されしとぞ。又其柳もゆかしかりけれど云

袋の注のめでたき雲をつゝむ虚妄を。伝ぜん人のために。證にそ説を出ん
もの也。其義ともりふべきぞ。○考るに。四分律行事鈔 釈道宣述 下三
十五巻 僧像致敬篇第二十 十六丁目 曰佛告女曰掃佛地得五福一自
心清淨他人見已亦生清淨心二為他愛三天心歡喜四集端正
業五命終生善道天中 云 又同巻 三十七丁 導俗化方篇第二十
四 三十七丁 曰凡以穢俗之身入寺踐金剛淨刹法地自多辛儀式
若去時須贖其過隨施多少亦有不空 若布絹香油澡豆華水下至掃地除糞
此入寺法ハ中國傳之矣余更略出護過要術 云 此説を證と
すべし。門弟千那ハ律師也。衣詰なれども翁きて要めしにも
何らん。郭林宗ハ。俗に云まれい好みして。更質滋めあきらんや。送

旅乃主家と。寺院とハ。あわりいるべし。此律法去寺の法をとりてすれ
ば。翁の賓みして。只掃地をとりて。一宿の恩をあがなひ給ふなりと
殊勝にこそ詠べけれ。何ぞ郭林宗よまれんや

あかくと日ハつれなくも秋乃風

袋 云是秋の日のなほやまく西山に沈まんとつれなくも早苦し
秋風の身に入るさ旅あひゆる歴し 解 云新古今
集 旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし 定家
の心にかなひて秋の風情言外にあらく翁此歴二三章此秀逸を
袖日記にしるされ 林 此句を出さば

(説)(解)春秋の姿といへども此句奥の細道を考ふるに元禄二年七月十五六日比の吟也。然れバ暑き時に作れバにしや秋暑れ云涼りもやゝ比のことといへり。七月と九月の違ひあれバ途中の吟と覚ゆる也

玄妙切

春もやゝけしきとゝのふ月と梅
あかあかと日ハつれなくも秋乃風

古今抄に云およそ此二章を議するに三節の詞に切べき所もなし或ハ月に有るは梅に有るとて或ハ夕日の落句にあるとも有るすゞ秋風の発句にも有るすべし春秋朗詠と云へし一句外に詠嘆の余情をふくみ発句ハ纔に発句ならんにハあらずや玄の玄にして衆妙の切とも云ふ是を知る人の学て学ぶべきにもあらずと云ゝ ○芭蕉翁頭陀物語 涼袋作

予云翁加賀の小松にありし時或夕此句を得られて秋の山ともてなされけるに小松難じて曰此句意ハ今一二里も行ともへく秋風吹ハあしむへく日ハ又早く傾きむとするに霜枯なる夕附日遠山松も紅ゐなるいまだあき峯の夕日といへるむ流ハ山と云字居りもて氣象の廣からねバと云に翁うなづかれてさて加賀の小松あると云秋の風やと直しけるや此秋の風ハふしむ夕の情を見しはかなくと日を流るも入果し風ゆへくと形に比する実の旅人の姿ならんやり始より風といふて聞人なかりんと志ゝもの事とかかなしむる所なりと云ゝ是篤。近来此さといへども。此句の解におゐてハ是に返すものなりと云却しぬ

其儀ハ知らぬ人の説。句主ハかゝる趣意なり

よし野にて

きぬたうちて我にきかせよ坊が妻

【袋】云吉野の奥或坊に一宿を借りて出る句也。心ハ我をも世捨人と

此心ハ人に語りてをかしく何ともなく聊かなるを恥りけれバ

幸砧打を請へ聞せよとの句也【林】云詞ハよし野すてしふるみよ

しのの山の秋風さよふけてふるさとさむく衣うつなりと侍る

古歌を思ひよせて此句法趣意ハ一二句せつらなる誹諧子の自

然にしてあの句ハ此句にとりて[illegible]衣ホとハ中世元

砧打をハいふべし鐘のおとハいふべからず其外の附会の説是

言語のかゝるにかけて深きをたゞらうえぬことへうちかけて嫌しき旅寐の所

もよし野の景色にせめて衣うつ音ときゝてまさる旅寐の哀ん

ともいふ只旅ハ[illegible]事足らぬを情よせへし諺の坊子 【解】云

よし野にて[illegible]伊勢

の町坊主と思ひて[illegible]の入口に形を並べて旅客を留る也

家居也挽物細工と商ひて箱根の湯本に似かよふ

【説】【袋】坊と僧坊と思へるハよしの奥なしからず。僧坊ハ妻

らんや。一向妄語不可用也。句選とゝろの[illegible]よし野にてとば

うつ旨。都て袋注ハ出ざる所。詞書ハ自己も出しらへて。おのれ

○芭 第四
が注に今世に傳ふるの。十には定みに是也。罪ゆるりのべしや。又我は
世俗いふる子孫なれども。今は人に譲るまゝにしては。いふなるものかや
いかなる人か。世をいふる人は。人心に異なるや。何とも知れぬ一玄也。【林】何ども
はかるども。他のことを交へ評する所也。鐘のね。花さつの意は。枝也けり
句の当用にかゝり。予も鐘のね蛍火の意に寄て遠く論ずる家
書好歩草（ホウダ ゲサ）に委し。又孫伝の序の號も。将此益也。迂遠といふ
べし。【解】此句を葛藤にして。文章に至つてはめでも書べ
されども。葛藤の字義。注なくしては。初華合点ゆかぬ也。然ら
ば句解をさし出し。初学のためには。当なる浅し。初心の
人を導くに。かの禅語などは。遠慮ありてべきことなりや ○

倭名抄云坊（ミチ）市（イチ）坊は別屋也。野外聚落也。（マチ）○東
雅曰凡坊とは。街市の惣名にて。商賈集り聚て交易する場を市
といひ。客商を留る所を邸家といひ。坐商の居る所を店家といひ。
其物をうる所を肆といひしもとぞ云。猶拾芥抄に図委し。
みるべし。伊勢の町坊も。云ば重言の。謬り傳へて。俗家の詞也。変
しも。坊は旅客をとゞむる所なりといふも然るべし。○句意は。今より
酒に来らせ給ふといひけるぞ。折ふし秋といひ。古へも慕しく思ひに語
麻のこ絹なれど。古調をやと思ひ出る度に。さればこそ
中の海ほしくなれど。此町に女房に対して。ちと碪うつてきかせ
てたまへなど興じける。即吟に風流也。下句は古への生しかるまじ

○巻第四

ゆめ〳〵しるべからず。あら所がらといひ。ことばをいひ合せて。風興の
吟と見るべきや。

たゞ此小文庫に此句のこと出されたり。へつ記し出して併せ考へし

紫乃戸の月やそのまゝかうじ坊

林 云心は紫の戸とすゝいやしきあばらやなれども世にこのもしき。ゆ
かしかりける又空也上人極楽へ参るけしき様といひしにつとめ
てかへる所なり紫の戸のかうじ坊をかりて一入月のめでたき
閑室の主人も殊に心がみて秋夜のよく中さなる也去此不遠乃
公ととがむる此句紛へし去る孤輪の月ともすぐす玄賓僧都
も思ひ出らるべし 鮮 云紫の戸とすゝ(同上)例に山家集の作一と

ちくへる此叟の観想也又ある書に曾テ空也無シ水之地ニ多穿井々
必并冷以テ其常ニ唱ル弥陀ノ号ヲ借ニ名ヲ弥陀井ト往々而在焉荒原曠野
毎ニ逢ニ遺骨ニ措聚一処ニ念弥陀名ヲよりて世の人かうじ坊と称ふ又市上
人ともいへり句中のかうじ坊ふかふ寄る 袋 此句と出さん

説 林 ゆへなしとぞ。紫の戸はかうじにかゝりてと云。戸とかむの縁
語と覚えるにや。此草に縁語にして秀句と云べし。翁なんぞ此
評を公あるにや。翁に課罪らるの也。又あるじのなす。ちしぬまたにま
ぎらし評したるにや。又空也の事は。諸く無益也。釈家の名あ
と。引んに。眼をまぺらず又玄賓僧都。いかめしきせ也。ましや玄賓
の古語りなや。検校もせくして。印版にしるしは。廉末のこと有

なんずる僧を物案ふ侍ふ。解 かゝる泥をしるども。空也の別名のなりしに坊は。此句にハ寄りざるなり。○流らく思ふに。此句謂まるほし。此志ぞの戸ぞさしたる所に。なくてハ叶ハぬなり。或ハ空也の舊地か。又ハ隠者僧徒の庵室などを初座かる事。何ぞ由緒のあるべき句と見ゆ。まろ時侍りしに。詞書もなし。惜哉不詳。

○この柴の戸の抱りぞ風月の風情。されども何かざし坊のなれしへの住居めも似く。今世の人もゆかしをやいかん。なばよいづくみもあり。柴の戸は月ハ。なかりし坊よ。そのまゝありと云ハ。雲とつゝみ。風が追ふごとくなるめ。和歌の明哲を侯のと○然る小芭蕉小文庫をつくりしに。志りと詞書なり。其詞云ふ云く。

柴の戸と呼ぞいやしき名なれども世に好のもしき物にぞありける此歌ハ東山に住ける僧を尋ねて西行のよみ給ひてよし山家集にのせらるゝいかなる住居なりや見えかの坊なりしまれぞよなり。志りけば。翁も西上人の昔によりて。なりしく風と呼せまいらする顕然なり。解 ふ云空也なりし坊なりし京山よ住居ましめや。郷小ぞも時代なるうしてお遠なり。○空也上人者圓融院天禄三年九月十三日寂ニス東山西光寺ニ八十三歳又東下野守常縁聞書曰。空也世以テ皆延喜ノ御子といふ中金く御子にたなれど延喜三年癸亥誕生天禄三年壬申七十歳にして入滅也と云云

名月や池をめぐりて夜もすがら

林 云この句に照月なくとも定家卿の秋も半すぎぬ十五夜とも
云ひ出るもてにり山谷の秋水清く底なしと水澄わたりて清光乃
く満なきもえへるにあきらか句ハ眼前也山定く去りあらくるに明るく
月を翫しく園の陰をへとむしかりの思ひあらなるも老をむらんとくか
く我のことをかきり待るやと夜をすがら逍遥の心なり 下略 解 云
此句ハ詞をくりくと云下して芭蕉庵一夜の佳興なるへし宵ハ経
ハ行のなごしむやうにおもしろきより下を立て句をすらぬ詩を吟
をや光半天にかかる池にハ氷をとまる如く盃をもらふ客を

云ひ中くも滴して暁ハ士峯に光をかさね幽の寒枯も親くて更くかへるく
月のわしきのこうりと詠る歌も知と露もつる気色をハ句外の意味なりけれ
吾月の雑にて盃なにハ下略す 袋 此句を出さし次

説 林 の深文章をかざらんとして却て雑々紛々句の餘情なき
らかなるは模羅含糊也さして知る人文ふ侭し予が不文として餘多の
人くふえをしらど人ぐらに何のゆかりとも云しあらず又園の係者の
一派翁の心骨にわらず独席の居るかなるゝを知らしぞりとより
隠者とふ翁をうらんで是翁を知らざる妄評後の人を迷わせて
妄見也 解 佳興の風情京を文章にてきん中とさくれたこの
夜の風流雲を紙とし声を筆として出とも やはり画さ

○芭蕉 四
ばかりきかれど京極の記解して一句の意をかけたるく。初心者はとかく見侍る事違ふべし。先輩の我流に紛らしずして初学の人のためにはいづれとも都て上古より詩歌の注抄などもとられ。文をはげまして質朴に正しく記さる成要なりさ事によりて古抄又はよく人の耳に落て。その中より亦発明ある後哲達多かりし也。終夜の詞にかゝりて。夜一よさ寐もやらぬ池とめぐり嵯士峯にとゞまるをつれなとは。いかにやうらん。

○又詩歌連俳。いづれの月いづれの花の惜まざらむや。只詩歌とりいでんは一生涯尋ねられる。さらざるべし。此句に寄りぬ。詩歌も見えられ。それのみにあらず。深し解し。景色と文章

に付ては云まして媚ゆる女の都てあざやかなりしを。又終夜と云詞より。暁まで池をめぐりて月を詠めあかせしふとしいへるものず。いかに月を惜しむ花ありしゝ人とても刹那の隙もあるまじハ。狂氣人なりといはん人も云りなりや

詠むうれ花あるといひし首の肯　宗因

名月やえつめても居ぬ夜ひとよさ　湖春

是人情の詠の風雅にして。かざらざる天然自然の無き也

○徂徠譯文筌蹄曰　終夜（ヨモスカラ）　通宵（同）　宵ヨリ暁近ニ至ルヲ云歴史醫書ナトニハ誠ニ夜通シ之也文章詩歌ノ上ニテハ切ニ思ヒツヨク夜ヲ更ス事ヲ見センタメニヨモスカラト云也と云云

初学のため不足を挙て書しし。翁を狂氣人となすることなかれ。
句意ハたゞ月を見る心をもて推考し。猶風雅に正統の
原説を俟のみ

雲をりをり人を休むる月見かな

林云西行中々に雲のかゝりてこそ月をもてなすかさし
なりけるも此歌をやかなへ侍らん云々 袋解 此句を出さす
説 其中に。をりをり雲のかゝるハ月をもてなす幸しなり
とはいつも足らん不知 ○東西夜話曰。求聽文通
の際下ニ云此紙面ニ通先師に此類三四句しるして度々連句

師に称せられ我等も公むつかしくは定句皆も雲に休む八月
の不賞就と申すはめてす有は格式にかなへず人には芭蕉
もよかしと許さしれ其うつと同し意味にて更合て萸菓に
なすんはいなせたるかよくは花にそれ月秋ハ目出し見入りしは
桜ハさえて春ハ盛しきほとゝいふ人ハ物の膽をえる所をきいさめ
あくいのか乗くは世の人已か女房に見惚かると足らぬ事なくはを
恋しうるは男女の情も羽子板の夫婦に来しひとしんハことにても
しかし面し雲折々のやうにうしぬ人目を関と越すに又いかのふ
あひんてしものいかに嬉しきにかんかきかうし紀ハ終日に添ぬ月
ハ終夜見んとふ人なるを恋の部にあてゝあめかしき此深意に

○篭第四

ぬべし（予が爰に云いし妄説にあらずぞ古人の詠のたゞしきをえらべし）或人此句ハ何しの寄みてせう

まてらとりふけるに山てきる連歌なるハ古詩古歌よりうつしてとらるゝす

こしまかやあらん我俳諧ハ宗匠の相好く云ちかす跡あし又詩を

の寄によらると云ハえらる人の評判なるも是非なく其通りにして

次に古詩古歌とあつかひ此発句ハ海ぬと云ハ古人の粕をねぶ

るゝく不自由なるものにして有ん（予が爰に論をし妄説にあらず西行の寄を引出し評も亦非也）先師乃

云ハ月のうちにもらく満ちきハさうしかるぬる雲折くかゝきも有も

体て面白いと云るものを此に何の古寄も座らすを入れしき句也（下略）

（をことと去しとの人正統の流と御案にえせもなせもしならんぞ今又家に汎して解らす）○同上 又此地に何某と云

学者の作りし雲折くの云ひしえツ古人の格式にかゝはてら字除

てのみ文字二三の上に系字は数へまれ是ハ二四の病ありとすくはし

ある人のいつる二三と云ハいふに彼人の云雲ハされてとらず十さ宗苑坊

曰宗ハいさ書物の古式を考へ次俳諧ハ只物の本情に叶はせて附る

よりしきに於ても古人の二四と云るハたとへを云それていと云ぬの

二四成へしそれハ口にたよりて語路なしるを古人もいかねるも我

いとぬる雲折くと云ぬハ二四とても口に而すらね然るを二句のはつ

ハよけきども古人の病ひの二四なるををするもあるぬと云人と古式を

得あらいはらとも又ハ其物我補ひたる也云へし（下略 是らも初心の為に余へ入れハ汎に出す）

○再考するに世説曰司馬太傅齋中ニ夜坐ス于時天月明浄都テ無

纖翳太傅歎ジ以テ為ス佳ナリト謝景重在テ坐ニ答テ曰意謂乃不如微雲點

綴云〈スルニ〉云是倭漢人情の風流同じ。此をかりて。西行の哥も。兼好がつれ〳〵の四季の段にも。西行の詞を没らし也。翁ハ右の人〳〵の言ひし粕をなめて。月花を人と体かせけるは。実を古今獨歩の粉骨と称すべきなりけらし。抑この世説乃古事。引出すも及ばぬほどに縁をかくのごとくに。せんさくせば。いか程も有るべし。ゑ今慶まかりなば。翁の風骨にいたらざる媚人の志らざらん知るべし。今只句解は。いつれもかゝる無益のことを多く記し出すを。准して了解なるを過し。予此故事を出して。無益の解の手かんとするゆへ也

富士川のほとりを行に三つはかりなる捨子の哀げに
解に捨より菓子など投げて通るかとなし
泣ゐるを捨るを哀れがけてうたふるまゝ

猿をきく人 すて子に秋の風いかに
（猿とすくく人とすて）

林 云猿をきくといふは漢土の詞にて又西行の哥にも蓬いふに草木の声を引出しても無益なれば略す 解 云巴猿三叫暁霑行人之裳 三ふんてはきなれたよそへて人の袖をいはせるもとのこそおく〈哥二首引出しも無益〉
中へ略す かゝる詩哥の趣をたよりて捨子の秋風にあへる暁の猿と断腸はつまろ妙くらむと也此句を或集に猿をきて行く句意分明ならん
〈猿とすんと記せり〉
嵐雪袖日記を以て記句とせん

説 林二 評いかし引哥一首の外此句に無益なるもの也。所以は
いふかの詞をかりて引ならしえ也。文嫌冊も富士川に

用なし不堪なるよしあし。〔解〕引哥二首無益也。此支前加ふる
でも。此句意ハ淋しきゆゑ也。作し出したる也。おもしろきくらく。翁の句々
無下古哥をとられしかもしらず。是らハ途中の感偶即興にして。
詩歌にもいはるる念なきところ也。たとへバ。太平記。并平家物語
等と。評判せし。或代或時に己居合せて。その義ならんハたゞし数百
年の後。泰清乃御代に遊びて。乱中の人事を推はかるにて無
益に片腹痛し。それハそも爪にて蚤を殺し鞘にて縄をと
るがごとくもたやすくして志かるも其理なるを知らずぞ多かりし。これ
ぞ東西夜話の文脈を。并章に引出せしもかくの如く。附會の古哥引
ときのこと應きたる也 ○五文字四品之〔説〕猿を賣て人 句選に此を不如此

猿ときさて 誹林子記所の此 猿を賣て猿を買人 本朝文鑑并句解如此記す 叔猿をうて人とハ
古風の句。初念ハかくも出しなるべからず。浩然の方々耳にたてど。
時よ再案ありて。甚せしと見えたり。猿をきててとハ解に云し如く
句意ハいのらず。猿を賣ても古風の調し。猿を買人とハ。するやうにて
ちとき句意もすゑやかし。吏登が紗日記の見え可無也。吏登一とせ嵐雪と改む
その比の見え出なりしを嵐雪紗日記と云也 去らくして又吏登先樹と號る 考ふに。猿をきてハ全く誤也。猿を
きゝて書けるを下のきの字を兼忽人傳寫にかやまりたるにして
猿をききてと傳ふと見えたり。古来より傳寫の誤いくらもかく
是非もなく。偏に後世に残を疑ふべし。辭言いつき。正しと應き
ものなれば。ものくまうらがくて年月經る侭ならバ。たとひいふがし

きすけりとも。此すなく。是非なく。それに随ひて疑ひを闕事漢にこ此類多し。詩歌ハなかなかの事也。扨て俳諧なるとや。たとひ古風あるとゆふとも。定めがたかるべし。然れバ捨て置ぐとも宜可也。此句も前に云ごとく。思ひていふにぞあるさびの句也。只句意をのとさとしねど。哀なり感ぶべきとすや。○巴峡の暁猿ハ他國なりど聞と叶ハいで。日本の山家。近くハ八王子邊。九月の末頃ハ夜とむぐらて啼く声。極めて悲しく哀なる物とかや。猿をすてさへ悲しむ人。此捨子に泣声をあはれまざらんや。是汝へ思ひがけに悪捨たる親ハいふにぞや。悪しきハ親まじ。浅ましき世と観念せ量にして。句中に所無なり。秋風とあはれさとを添て此季の入ずあるべき名人の手書也。如何ぞ感仰すべき事也。猿と捨子を評せんハ。猿の句に感じ。是ハ捨子乃句とし猿ハ取合あるとしるべき也。

右十有六章

蕉翁發句說叢大全巻第四終

〇 壱号四畢